女性室広報誌

あいあう

29 2018 JUNE

テーマ：I won't be silent.

特集 カノジョたちの物語（ストーリー） 6

レポート 介護する息子たち「女性室スタッフ学習会」 8

報告
第17回 女性会議 2
女性室公開講座岐阜会場 10
女性室公開講座 14
第7回女性住職の集い 15

つぶやき 多様な性と共にある教団へ 鹿音のん 12

ゆらぎ 今度は共に 森 奈穂 13

第17回
女性会議
2017年5月8日～9日

一人に立つ
～中世を生きた女たち～

女性会議では近年、「一人に立つ」のテーマで継続して学んできました。今回は西口順子さんを講師に迎え、「中世」の時代、女性たちはどのように生きていたのか、教えがどのように語られ女性たちはどう受けとめてきたのかに焦点をあて、「一人に立つ～中世を生きた女たち～」をテーマとして開催しました。

西口さんから、五障三従・変成男子・女人結界と女人成仏の問題を手がかりに、日本の仏教は女性をどのように考えてきたのか、また中世の女性と出家など、多岐にわたる視点から講義いただきました。

また、このことは宗門全体の課題とし、事実を明らかにし引き継いで議論すべきであることを、あらためて指摘いただきました。

講師●西口 順子さん

五障三従と変成男子

女性と仏教ということでお話しします。はじめに日本の仏教は女性をどのように考えてきたのかということで、五障三従、変成男子・転女成仏といういわゆる仏教が用いてきた性差別文言を中心に考えていきたいと思います。

まず、女人不成仏についてみていきます。歴史的に見て女性差別や、女性を排除する文言は仏教に限らず、東アジア全体に存在していました。まず、『法華経』の「提婆達多品」には、「女

講師プロフィール

にしぐち じゅんこ●1936年京都市生まれ。京都女子大学文学部史学科卒業。現在、相愛大学名誉教授。日本女性史研究者。

主要著書・論文

『中世の女性と仏教』（法藏館 ·2006年）、『日本史の中の女性と仏教』（共著 法藏館 ·1999年）、『中世を考える　仏と女』（吉川弘文館 ·1997年）、『女の力ー古代の女性と仏教ー』（平凡社 ·1989年）、『シリーズ 女性と仏教』全4巻（共著 平凡社 ·1989年）。
「「転女成仏経」について」（『中世絵画のマトリックス』Ⅱ、青簡舎・2014年）、「蓮如と女性」（日本の名僧13『蓮如』吉川弘文館 ·2004年）、「王朝仏教における女人救済の論理」（大系 仏教と日本人8『性と身分』春秋社 ·1989年）。

人の身には五つの障りがあって、梵天王・帝釈・魔王・転輪聖王・仏身になれない」これが五障です。三従は仏典にはありませんがインドの一番古い法律書である『マヌ法典』にみえます。その中に「少女、或は若き婦人、或は老女は、何事をも独立にてなすべからず。たとえ家庭の用事といえども」、「婦人は幼にしてはその父に、若き時はその夫に、夫死したる時は、その子息に従うべし」。また、中国古代の経書『礼記』の中に「婦人に三従の義あり、専用の道なし、故に未だ嫁せざれば父に従い、既に嫁しては夫に従い、夫死しては子に従う」とあります。これをあわせて五障三従といって女人不成仏を説いています。

その次、変成男子・転女成仏をみていきます。変成男子というのは、女性は女性の姿のままでは、仏になれないので、女性の身を転じて初めて往生できる、成仏できるという考え方です。さきほどの『法華経』提婆達多品、『大阿弥陀経』第二願、『無量寿経』第三十五願、短いものでは『転女身経』があります。お釈迦さんが説法した時に、無垢光女という女性が男子に変成して菩薩になったという内容です。これとは別に『転女成仏経』というのがあり、平安時代中期から中世を通して女性の没後供養に用いられていました。

女人結界・女人禁制

次に女人結界・女人禁制についてお話しします。9世紀前半になると、山や寺では一定の領域から女子を恒常的に排除する結界を設けるようになりました。ルイス・フロイスの『日欧文化比較』によると、「ヨーロッパでは女性はどこでも望む教会堂に入ることができるが、日本の異教（仏教のこと）の女性は禁ぜられているいくつかの寺院に入ることができない」と書いています。これは女人禁制を意味する文言として海外に紹介された例です。

平安初期、天台宗の例からみていきますと、最澄は『山家学生式』に「俗別当両人に監督させ、盗賊・酒・女等を禁ぜしめよ」と、また『根本大師臨終遺言』には「院内は清浄の地であるので、女性は入ってはならない」ということが書かれています。これによって、比叡山の結界が守られているわけです。

空海の場合は、『弘法大師御遺告』に「東寺僧房に入ってはならない。女性は子孫繁栄に不可欠の存在であるが、仏弟子にとって諸悪の根源であり、女性が近づくと善法が滅するため」と書かれています。ただし、この『御遺告』は実は弘法大師自身が書いたものではなくて、11世紀頃までの東寺の現状を伝えたものと考えられています。

では、なぜ女人結界なのかというと、様々な議論がされてきました。大きく

わけて四つの説があります。

A 女性祭祀の場であったという説、かつては女性宗教者によって祀られる聖地だったが、男性宗教者が入ってきて、その聖地の禁足地内を占有して新たに祭祀を始めた。その時点から女性宗教者の聖地はそのまま女人結界に転じた。

B 戒律（不婬戒）にもとづく説、これは、男性宗教者を主体とした考え方で、女性は修行の妨げ、本来は仏教の戒律に由来して女性との性行為を未然に防ぐ目的でできたもの。11世紀末から12世紀頃に戒律遵守のための自主的入山禁止を行っていた。

C 女性のケガレ説、9世紀後半から女性固有のケガレ観が意識されはじめて、触穢思想と女人罪業観が結びつき、次第にケガレ観が肥大するなかで女性不浄観が形成され、聖域から女性を排除した。

D 聖空間からの排除説、女性に対する穢れ観・不浄観はインド古来の信仰に発して、仏教・道教と習合して、日本古代では7世紀から8世紀前半くらいに意識化され、次第に男性修行者によって受容されて、9世紀頃には山岳霊場・寺院への排除が進行する。社会に浸透するのは10世紀から11世紀前半で、女人結界が増加し女性みずから聖空間から排除されるべき存在であることを次第に認めるようになる。

私は**D**の立場をとっています。血穢・産穢の禁忌と仏教に関しては勝浦令子さんが積極的に取り上げています。議論は浄穢・戒律の問題に深くかかわり、現在も結論をみないまま続けられています。女人禁制の問題は現代の問題でもあります。明治5（1872）年、政府は太政官布告を出して女人禁制を廃止します。大多数はこれに応じていますが、例えば吉野大峯山や祭礼の時の神輿や鉾、大相撲の土俵、宗像（むなかた）神社の沖ノ島は、未だに女人禁制です。

高僧・宗祖の女人救済

高僧・宗祖・教団の女人成仏・往生論では女性を被救済者の位置に置いていると考えられます。生まれながらに劣った存在である女性を、仏あるいは宗祖がいかに救済したか、いかに差別しなかったかを説明して、「このような罪深い女性でも仏（または宗祖）は救ってくれる」、「このように罪深い女性でも仏（または宗祖）は差別しなかった」という態度は、伝統的仏教史はもとより歴史学の立場でも存在していました。11世紀から12世紀頃、天台宗の学僧は信仰を持つ女性に対してどのような説明をしたかというと、転女成仏・変成男子説によって「婦女あることなし」、つまり浄土には女性はいない、男子のみ存在する、というのです。まあなんと殺風景なと思いますが、女性は全部男子になって往くのだ、というような説明をしています。

中世の女性と出家

中世の女性の生き方は大きく分けて、結婚・就職（奉公）・出家の選択肢があります。中流貴族では宮中の女官になったり、上流貴族の侍女や女房になったりします。出家する場合は最初から尼になって信仰活動に入ることもありますが、結婚して未亡人になって出家する人、仕える主人に従って出家する人や、子どもの時から出家する人もいました。内乱が続く中世には女性の出家者が多く生まれ、亡き夫、父、息子の菩提を弔うために出家するケースが非常に多かったのです。

日本で尼が誕生したのは『日本書紀』によれば、敏達13（584）年、蘇我馬子の要請で渡来人の司馬達等の娘の嶋と他2名、合わせて3名が正式に受戒をした比丘尼になるために、崇峻元（588）年に学問尼として百済へ留学し、崇峻3年帰国し、尼の指導者になったと伝えられています。

奈良時代になると尼寺は僧寺の側に隣接してセットで建立され、諸国国分寺と国分尼寺のような形は全国的に広まります。『日本書紀』推古32（624）年によれば寺の数は46、僧が816人、尼が569人でした。尼の活動は僧侶と同じく、仏事の執行、経典の講義、五穀豊穣や天皇の身体護持などの祈禱でした。貴族たちの家に居住した尼は仏事や病気平癒、仏教の講義や子女の教育を担う存在でした。

完全剃髪をして僧服を着ている尼は変成男子を表しているという考え方があります。自分の性を捨てるわけですから、性を捨てた段階で変成男子という考え方です。中国の例で女根を滅し、男根が生じた（『法華伝記』巻7）という表現もありますが、そうではなくて形を変える、つまり今までの生活と形を変えて別の人格になる。それが出家のもつ大きな意味だと考えられます。

むすび

仏教が説く五障三従・転女成仏・変成男子・女人成仏に関わる文言は、日本における社会体制、「家」制度の根幹の思想とされた儒教と結びついていっそう増幅されたと思われます。女性たちはこうした考えを、僧侶や男性から聞かされ続けてきました。生まれてから死の儀礼まであらゆる場面に登場するこれらの文言は、時代を下るにしたがって浸透した事実は否定できないでしょう。しかし一方で女性たちは、社会の中で様々な活動を行った事実が明らかにされつつあります。差別は負の遺産ですが、事実を明らかにし引き継いで議論していくべきだと思います。大谷派の女性会議がここだけではなく、社会全体の差別問題と連動していく必要があるのではないかと考えます。

（講義抄録／編集・女性室）

カノジョたちの物語（ストーリー）

仏教や真宗を学ぼうと志す女性が増えています。
けれども、仕事や子育て、介護などを担っている女性にとって、
そのような学びの場に身を置くことはとても困難です。
今回、3人の女性に、それぞれがどのような道を歩んでこられたのかを
お聞きしました。

お聞きした内容

1. 真宗を学ぼうとしたきっかけ
2. その時の周囲の反応
3. 学ぶうえで苦労したこと
4. 学ぶ前と学んだ後での変化
5. 今後について

村嶋裕子さん

1985年生まれ。化粧品会社勤務の時、東京の真宗会館での2週間の教師資格取得コースを受けた後、教師試験検定を受けたが不合格。現在は保険会社に勤めながら、夫と3歳の男児と暮らす。長浜教区第21組等光寺衆徒。

1 理由は２つあります。１つは「お坊さんは銭泥棒」とか「税金を払わずに呑気にやってる」と言われていたので、会社内では私がお寺の娘だということは言いませんでした。一方、仕事で接する外国人は自分の信仰を大事にしているので、「私、実家がお寺なんです」と話すと、「どういう教えなの」と好意的に質問してきました。でも私は仏教について何も知らないので答えられなくて悔しかったし、勉強していたらいろんな話ができたのにと思ったことです。２つは日本人は宗教の話は避けるのに、パワースポットや神社に行ってお守りやおみくじを買うのがミーハーで嫌でした。私も一緒に神社に行くことがありますが、自分に軸があって行くのと、無くて行くのとは違うと思いました。自分に軸がほしいと思ったからです。

2 ２つ上に兄がいます。お寺は男がエライみたいなところがあるから、私は生まれた瞬間から、「好きにしていいよ」みたいな感じでした。母は結婚前に専修学院で１年間の寮生活をして大谷派の教師資格を取っているので、「人生の中で大事だよ」と薦めてくれたことがあります。ですから、今回私が勉強したいと言ったことには大賛成してくれました。父は始めは「なんで？」と思ったみたいでした。勉強する＝資格を取る＝僧侶の仕事に就くという発想だったからだと思います。でも、私が勉強することには喜んでくれました。

3 何も勉強していなかったので講義が全くわからず、特に仏教概説が難しかったです。教師試験検定では５教科のうち１教科しか受かりませんでした。何事も挑戦だから受験しましたが、もっと勉強しなければという課題が見えてきました。次に受験するまでにもっと期間をかけてきちんと学ぼうと思います。

4 以前からなぜ政治家が靖国神社に参拝した、しなかったがニュースで取り上げられるのかわかりませんでしたし、何が問題なのかを誰も教えてくれませんでした。靖国問題の授業は女性の先生だったし、わかりやすく勉強になりました。また、私は一時期、ファッションやメイクなど見た目ばかりに気を使っていたことがありました。母から「そういうものを全部取っ払って裸になった時に、その人の価値がある」と言われたことがあります。その時は奥が深すぎてわからなかったけれど、最近わかるようになってきました。

5 お寺を離れて働きながら子育てをし、「ザ・平均」という一般人の生活をしています。その中で自分の軸は持っていたいと思います。そのためにはもっと真宗の勉強をし、人生経験を積んでいきたいと思っています。

齋藤瑶子（さいとうようこ）さん

1988年生まれ。父と祖母との３人暮らし。母は入院中。兄は県外で就職。東京教区東京２組明順寺副住職。

1 大谷大学の大学院まで進んで大谷派の教師資格を取得していた兄が「お寺を継ぎたくない」と言って、家を出たのがきっかけです。小さい頃から兄が継ぐのを当たり前のように思っていたので、私は得度もしておらず、一からのスタートでしたが、父である住職と相談して学び始めることにしました。

2 ご門徒さんは、お寺を継ぐことを真剣に考えすぎていた兄の姿をよく見ていてくださいました。「性格的にはあなたの方が向いているよ」と言ってもらった時は、「ご門徒さんて、家族みたいだな」と温かい気持ちになりました。実際の家族からは、「女が法衣を着ても格好悪い」「女は男のように立派なお勤めができるわけじゃない」という意見があり、お寺の人の方が住職＝男性という感覚が強いように感じました。

3 母が入院していてお寺を空けることができなかったので、教師試験検定で取得するしかありませんでした。検定は難しいというイメージがありますし、合否が決まるのに何年かかるかわからない一番先の見えない方法だと思います。女性が住職になる場合、生まれた時から継ぐことが決まっていたという人は少ないのではないでしょうか。急に住職が亡くなったとか、病気になったとか。その場合、お寺を空けることができないので検定を選ぶことになると思います。しかし記憶力の衰え、勉強法がわからない不安から教師資格の取得を諦めてしまう人もいると思います。ですから夜間の学校がもっとできてほしいと思います。

4「自分が○○をする」という考え方が非常に強いことがわかりました。人に出遇って、南無阿弥陀仏の呼びかけをたまわるということの温かさ、大切さを感じています。ある聞法会での感話の中で、住職になることへの不安を話しました。その後の講義の中で先生が、「住職は阿弥陀様でしょ」という言葉をくださいました。その時、私がご門徒さんを教化し、私がお寺を背負っていくと思っていたこと、そして、阿弥陀様が私を教化し、阿弥陀様が私を担い、背負ってくださることに気づかせていただきました。今でも心が疲れると、その言葉を思い出し、元気をもらっています。

5 僧侶だから、住職だからということを超えて、一人の人間としてお念仏に出遇えたことを嬉しく思っています。お念仏が相続しますようにと願うのみです。

畝部真紀（うねべまき）さん

1971年生まれ。ダウン症の息子（専門学校生）と高校生の娘と夫の両親の5人暮らし。夫の死後、同朋大学の別科で教師資格を取得。今後、住職になる予定。岡崎教区第23組願成寺候補衆徒。

1 私は核家族でお仏壇もない家庭で育ったので、仏教のことも親鸞聖人のことも授業で習う程度にしか知りませんでした。夫の仕事の関係で京都とアメリカに住んだ後、日本に戻り、お寺に住むことになりましたが、何もわからない状態でした。それで、教区の坊守講座などに参加し、そこで知り合った友人と月に１～２回「仏典童話に学ぶ会」に参加しました。この輪読会で、自分と周りの友人たちの知識の違いを感じるようになりました。でも「この人たちはお寺で生まれ育っているし、大谷派の大学出ているし……」という言い訳が私の中にあって。そんな時に夫に相談したら「同朋大学の別科や教区の真宗学院もあるよ」とアドバイスをくれましたが、子どものことがあり、いずれまたということになりました。今度は息子の障がいという言い訳がしっかり自分の中にあったのです。

　2015年の春に夫が倒れました。本人は治ると思っていましたから前向きでしたね。運命を呪いましたが、夫は「仕方ないよ。今はできるだけやってみるしかない」とにこにこしていて、なんて人でしょうと思いました。その後１年半の闘病を経て亡くなりました。夫の弟も妹もお寺とは関係ない生活をしていて継ぐ気持ちはなかったので、自分が教師資格をとって継げば問題ないと思いました。

2 夫の両親はもちろん、弟妹も喜んでくれました。総代さんからは「どれだけ安心したか……」と言われました。

3 通学に片道１時間半かかり、宿泊研修も多く、子どももいるので家事と両立するのが大変でしたね。ですが家族のバックアップがあり、なんとか乗り切れました。夫の死後、入学までゆっくり考える時間もなかったのが逆に自分にはよかったようです。

4 学んで知識は増えたけれど、それが生活の中で活かされているのかな？と思います。ですが、息子の障がいと夫の病気という２つの大きな出来事があって、初めて私は私のために「すでに南無阿弥陀仏の道」があったと気が付いたのです。そして「仏典童話」が自分の根っこであり、そこをもっと深めていきたいと思いました。

5 教区の夏の集いのスタッフになり、息子や娘を連れて毎年参加した体験から、子どもに向けたわかりやすいお話などもしてみたいと思っています。もっと学びを深めたいと思い、４月から同朋大学の３年生へ編入します。

「女性室スタッフ学習会」レポート　2018年2月2日

介護する息子たち

講師●平山（ひらやま） 亮（りょう）さん

ある日、女性室スタッフの1人が『介護する息子たち―男性性の死角とケアのジェンダー分析』という本を紹介したのが、著者である平山亮さんとの出会いでした。「息子介護」を通して明らかにされるジェンダーの不均衡な関係を是正するために手加減なく語る平山さんの本にスタッフ一同引き込まれ、ぜひ直接会ってお話を聞きたいということになりました。講題は「男性と男性性～ケアの視点から～」でした。
ここでは、当日の学習会の内容を女性室スタッフの目を通して報告します。

男性の自立と依存

男性の対人関係の研究が専門の平山さんが息子介護の研究を始めることになったのは、男性の様々な対人関係の中で、成人した後に全然出てこないのが親との関係、親との向き合い方であり、そのことについて誰も語っておらず、研究されていなかったからであると言われています。

男性性が語られる時、ほぼ息子としての男性が出てこないのは、男性が「子どもであること」は依存的存在だと捉えがちで、精神的な部分で誰かの庇護を求めないことが男らしいことであり、その結果として男性は弱みを見せられないし、見せたがらない。男性は自立を、まるで依存しないことのように考えているからです。

男性は就労の場では自立していると考えられていますが、実際には家庭にいる女性の無償労働に依存しています。この労働は必要不可欠であるにもかかわらず、あってもなくてもいいと見せることによって依存していないかのように見せてきたのです。日頃、法務と家事・育児・介護などを担う私に対して、極たまに夫から「お母さんはいいよね……」とかけられる言葉は、比較的時間の自由がきく、気楽な身分のあなたが羨（うらや）ましいという皮肉が込められたものです。これを「ケアを提供する人を貶（おとし）めることによって自立した個人を成り立たせてきたのだ」と理解すると、少し救われた気持ちになります。

「男の生きづらさ論」から

平山さんのお話で「目から鱗（うろこ）」だったのが「男性の生きづらさ論」の展開です。お寺に集まる女性たちがよく「今のお嫁さんはいいわよ……旦那さんが子どものおむつを替えたり、お風呂に入れたりしてくれるから」と話しています。男性は稼ぎ手にというプレッシャーがある一方で、女性から家事や育児の負担も求められるという「男の生きづらさ論」は確かに存在します。

しかし「稼ぎ手は男性」というプレッシャーは実は女性のせいではなく、社会の構造がそうできているからと言われて初めて気づきました。その社会の構造は、①家事や育児に関して公的支援が貧弱、②職場における性差別賃金格差（先進国の中で、一人親世帯、母親世帯の貧困率がトップ）、③妊娠出産、生理などによる体調不良を考慮しない就労システムなどがあげられます。その結果、家庭と仕事がバッティングした時の選択に男性と女性では格差が現れて、妻に対して「あなたは僕ほど世の中で稼げないよね。だとしたら僕が仕事で、あなたがケアをやるしかない」という交渉が発生するのです。

世の中には、「男性は弱音を吐けない」、「重圧を担っているから自殺率が高い」という神話が語られますが、男性は自分よりも弱い立場の相手には弱音を吐いているし、自殺率の話も、女性が負わされている役割が大した重圧ではないという仮定の下に成立していると聞き、物事の一面だけを捉えてまことしやかに語られていることを、いかに鵜呑みにしてきたかと思います。

息子介護

家事が全くできないにもかかわらず、家庭における主たる介護者としての割合が増えている「息子」は、家事は他の人が担っているから可能な話で、実は女性のサポートなしには回らない

講師プロフィール●東京都健康長寿医療センター研究所 福祉と生活ケア研究チーム研究員。従来の複雑なジェンダー不平等の構造を可視化するべく、国内外に蓄積された豊富な情報からの分析に基づく繊細な考察を行う。

という例も多いのです。M.DeVaultの『Feeding the Family』（家族にご飯をあげること）は興味深いです。「ご飯を作る」という作業は食料を用意して調理するだけではなく、献立、家族の好み、冷蔵庫の残り物、お財布の状況、これからの予定などを判断し、調理のタイミングを図る必要があります。これらは「感覚的活動」といい、「ケア」という作業が生活や生存を支えるものになるためには、不可欠なものです。この言葉に出会って、今まで自分が家事をこなす中で行ってきた、目に見えないような労働を言語化してもらえた喜びを感じました。平山さんは勁草書房の「けいそうビブリオフィル」というウェブサイトで、「名もなき家事」の、その先へという「感覚的活動」についての連載をされています。

「下駄」に気づき、「下駄」から降りる

私の所属するお寺の場合、経済的には住職が外で働いてくる収入によって家族の生計が成り立っています。お寺の法務や寺務をほとんど担っている私（坊守）ですが、宗教法人からいただく給与は、私一人が生きていくのもやや厳しい額かもしれません。とは言え、小さな寺院であっても、すべてを一人でこなしていこうとすると、かなりのしんどさを感じます。それでも住職が外で得てきた収入で家族が養われているという事実があるので、住職のしんどさから比べると私のしんどさなどはカウントされなくなってしまいます。私がうっかり愚痴をこぼしたりすると、「娘たちが困らないよう同じくらい稼いできてくれたら僕も代わりたいよ」とあっさりと返されてしまうのがその証です。

その言葉をなんとも釈然としない気持ちで受け止めていましたが、平山さんの講義を聞いてこれは「構造的優位の乱用」に当たるぞと思わず頷いてしまいました。「下駄」というのは気づかずに履いている「構造的優位」のことです。自分の意図とは関係なく優位に立てる状況を可能にするものを「下駄」と言っています。男性が女性よりも稼げているのは下駄に乗っかっているからで、劣位にいる私に稼げないことを持ち出すのは構造的優位の乱用（ハラスメント）にあたるわけです。

「真に平等な社会とは誰もが好きに振る舞ってよい社会ではない。下駄（構造的優位）を履いている者は何もしなくても下駄に乗っかっていられるから、そのまま振る舞えば勝手に優位になる。だとすると真に平等な社会というのは、優位な側がその優位性を自分自身の禁じ手にすることでしか達成できない」という平山さんの言葉に驚きました。男性からこのような言葉を聞くのは初めてだったからです。スタッフからの「なぜ平山さんのような視点ができるのか」という質問に、「女性たちが何十年も言い続けているのに、なぜそれに気づかないでいられるのですかと逆に聞いてみたい」と答えられました。実はこのスタッフ学習会に先駆けて、平山さんの職場へインタビュー取材で伺った時に平山さんが、自分の中に問うような内省的な男性学が下火になっているのが残念だと言われていました。「自分のこととして受け止める」ということや、「自己に問うていく」というのは、私たちが日頃仏教徒として生きる姿勢に通じるものを感じました。

社会の中で、体力的な面でも経済的な面でも女性より優位にあるとされる男性の側が、その優位性に気づき、それを自ら行使しないということがなければ、真に平等な関係は築けない。それが「下駄に気づき、下駄を降りる」ということなのでしょう。よく考えてみると、それは男女の問題だけではなく、寺族と門徒の関係などにも当てはめられることです。

スタッフ学習会を終えて

なぜ平山さんが「息子介護」を研究したいのか。ジェンダーの不均衡な関係に気づくためには、この「男性の介護」というのが一番わかりやすい教材なのかなと思います。相手のことをいかようにも出来る介護の場は、優位に立つ者が優位にならないよう意識するための実践の場でもあります。その時男性がいかにして自分の優位性を押さえることができるか、それを見たいがためにこの研究をやっているという平山さんの言葉がとても新鮮でした。

（女性室スタッフ　大橋尚代）

「男だから」「女だから」と決めつけていませんか

―男も女もいるから成り立つ世界―

講師 石蔵文信（いしくらふみのぶ）さん（大阪大学人間科学研究科未来共創センター招へい教授、イシクラメディカル代表）

「女はつらいよ」「男もつらいよ」
決めつけられると　グチがでる
年寄りだから　若者だから
住職だから　坊守だから　門徒だから・・・
「だから・だから」の決めつけで
自分らしさを見失う
「だから」だらけの私の姿　問い直してみませんか？

2017年4月10日、岐阜別院本堂を会場に、「「男だから」「女だから」と決めつけていませんか―男も女もいるから成り立つ世界―」のテーマのもと、講師に石蔵文信さんを迎え、「女性室公開講座岐阜会場」を開催しました。

医師である石蔵さんは、循環器科の研究の一方で「男性更年期障害」という概念を社会に広めた第一人者であり、中高年男性の精神的疾患を専門とした診療も行っています。また、夫の言動への不平や不満がストレスとなって妻の体に不調が生じる状態を見出し、「夫源病」と名付け提唱されています。

講演では、中高年男性のうつ病患者を診察してきた経験から、定年退職後の男性の現状と妻との意識のズレなどについて、ユーモアを交えながら紹介されました。熟年離婚の危機を回避するための方法の一つとして、「おい」「お前」ではなく「お互いの名前を呼ぶこと」など具体例をアドバイスされました。

また、夫が妻に生活を依存し、妻が夫に収入をあてにする「共依存」の関係が夫婦関係をこじらせる、とも指摘。夫が料理をすることで妻との会話が増えるなどの実例をあげて、「定年後はお互いが自立し、心地よい距離を置きながら助け合うパートナーの関係をつくりましょう」と結ばれました。

その後、参加者が15のグループに分かれ、『女と男のあいあうカルタ』でカルタ取りを行い、それぞれが手に取ったカルタの札について、「家制度って今も残っているんでしょうか？」「この句のとおりだ」「私たちの時代と今の若い人では違うのでは？」など様々な感想が語り合われました。

最後に石蔵さんから、妻に「ありがとう」「ごめんなさい」「愛してる」と気持ちを言葉にすることの大切さを結びの言葉としていただきました。

Report

岐阜教区第1組慶安寺
赤石幸夫
（女性室公開講座実行委員会委員・教区同朋の会推進員連絡協議会）

女性室公開講座のスタッフになり、初めの頃は「女性室」という存在すら知らず、参加しておりました。月日を重ねるごとに、その意図や必要性みたいなものが少しずつ見えてきました。

講師選考の時は、石蔵先生の出版された『夫源病』等を読み、この方なら今回のテーマにぴったりだと思い賛同しました。

講演内容は、男性には手厳しいものばかりで、男性達は苦笑していましたね。特に定年後のご主人のことを家庭では、「亭主元気で留守がいい」や家庭内「粗大ゴミ」扱いまで言われました。

お互いの存在がストレスを感じるようになると、後半の人生がむなしいものとなると言われ、お互いが自立して

共に助け合う方が末長く暮らせるのではないかと思うようになりました。

最後に、これからは、お互いに名前で呼び合うようにした方がよいと言われ、私も実践してみようかと思いました。

その後、あいあうカルタ会を15班に分かれて行いました。読み手の上田文さん（女性スタッフ）のトークも交え、取ったカルタの絵や内容に対し、皆さんからの意見等話してもらう企画、けっこう楽しかったです。

3時間という日程でしたが、充実した時間を過ごすことができました。

Report

岐阜教区第3組正浄寺

森眞理子

（女性室公開講座実行委員会委員・坊守会）

この公開講座の事前打ち合わせに出た当初、私はなぜ今、この会をもたなければならないのか戸惑いでいっぱいでした。しかし、実行委員の方々の意見を聞いているうちに、自分の中では当たり前でこうでなければならないと決めつけていたことに気づかされました。

講演の中で、石蔵先生は男女の性の違いを具体的に説明され、相手の行動や言動が理解できなかったのは、なるほどそういうわけだったのかと頷くことばかりでした。自分も相手にそう思われているわけだとわかったら、すっきり納得できました。その二人がどう認め合うか、解決策まで詳しくお話くださいました。ただ、納得してもなかなか行動で示すことができない厄介な私です。

お話の最後に、夫婦がお互いにうっとうしく思ったら、距離を保っておくということも大切だといわれました。考えてみれば、もともと一人である者同士が一緒になったわけなので、「プチ別居」してもよいと考えれば楽になります。

講座を終えて考えたことは、あらためて罪悪深重の我が身を問うというとき、男女があいあうとはどうしたら成り立つのかということです。この会は、これまで当たり前としていたことを問う貴重な場となりました。

Report

岐阜教区第15組本覺寺

岩佐善夫

（女性室公開講座実行委員長・研修部会）

女性室公開講座・岐阜会場の開催は、2015年6月頃の女性室からの呼びかけにより始動しました。話をいただきました当初は、「女性室公開講座」という耳慣れない名称に戸惑いました。特に、女性室が何かさえ知らない私は、雲をつかむようなありさまでした。「男女共同参画について」といわれても、私たち岐阜教区にとっては特に取り組むべき課題ではない、などと考えていました。

しかし、せっかく声をかけていただいたからと、差別問題を取り組む岐阜教区研修部会にて、検討を始めました。

以来、1年あまり検討を深めていくと、他人事だと思っていた「男だから」「女だから」との決めつけが、身の回りにいっぱいあることに気づきました。また、その決めつけが、かけがえのない能力、素晴らしい個性を押しつぶしたり、生きる喜びを奪ったりしていることに気づいていきました。女性室公開講座の開催を断る理由はない、女性室公開講座は私たちの課題だという声が高まってまいりました。

そんな議論を経て、研修部で実施原案をつくり、実行委員会が組織され、実施企画を練り上げ、今日の女性室公開講座開催となったのです。

さらに話し合いを進めていくと「だから」という決めつけが。他にもいっぱい出てきました。「若者だから」「年寄りだから」「子どもだから」「住職だから」「坊守だから」「門徒だから」。「現在の生活を深く見つめるとは、『だから』という言葉をたくさん見つけることだ」という意見も出されました。「だから・だから」がいっぱい振り回されて、「だから」の言葉で自分が決めつけられ、自分らしさが奪われている。それが、私たちの日常生活ではないか、そんな問題意識を持つに至りました。

この度、大阪から石蔵先生にお越しいただき、貴重な話を聞かせていただくことができました。「だから」という決めつけを考えさせる、楽しい「あいあうカルタ」もあり、この講座を通して、「だからという決めつけ」が私たちにどんな問題を投げかけているかを問い直す大切な機会になりました。

最後に、本講座が、今後の岐阜教区が男女両性の理解と協力のもとに運営されていくきっかけとなることを念じております。

つぶやき

多様な性と共にある教団へ

母方の実家であるお寺で働き始めて１年経った。と同時に、私にとっては「女の子になること」を封印して１年が経ってしまった。

化粧道具もウィグもお気に入りの服もクローゼットにしまいっぱなし。両親とご門徒さんには未だに私が女装することも、「女の子」でいる時の自分が好きであることもカミングアウト出来ていない。現状信頼できる人にだけ、自分が「女の子になりたい男」（MtF トランスジェンダー）であることをオープンにしている。「女の子になりたい」と言っても、「男でいるのはイヤだ！」と思うほど自分の性に対する違和感が強いわけではない。化粧をしてレディースを纏（まと）う自分も、すっぴんでメンズを纏う自分も、同等に「自分」という固有の性だと認めている、という感じ。だから、どちらか一方でいることしか認めてもらえない環境は私にとって息苦しい。

言葉にすればこうなるけれど、今この文章を読んだ皆さんはどれだけご納得いただけただろうか。加えて、こんな私がどれだけお寺に息苦しいものを感じているかについて、どこまで想像していただけただろうか。

私がトランスジェンダーであることを公にできる場の一つに、仙台教区教化委員会の会合がある。そこで、内部向けに性差別学習会を開き、仙台教区独自の「ジェンダーかるた」を作る試みを今進めている。女性室制作の「ジェンダーかるた」には LGBTs を扱った句が一つもない。だからこそ、「ジェンダーかるた」を LGBTs の問題もしっかり扱う形でアップデートしたい。性差別学習会を通して私がやりたいことの一つである。

ただ、始めた当初聞かれた意見は「どうしても自分の課題にならない」「どう理解したらいいかわからない」といった、正直ではあるが悲しい気持ちになるものばかりだった。

自分の性に正直に振る舞うことで周囲から気持ち悪がられたり、恋人から「死のう！」と自殺を迫られたりしたことが、私にはある。でも、他の教化委員会のメンバーにはない。深い溝が横たわっているのを感じた。だが、だからと言って諦めるという選択はしなかった。

大事なのは「他人事」でなしに「自分事」として聞き取ろうとすること。そして、当事者の声は今や本だけでなくマンガや映画、ネット記事などで沢山聞くことが出来る。何より私がここにいる。

そういえば教化委員会に入って初めて知り衝撃を受けたことの一つに、「男女両性で形づくる教団」というスローガンがある。「男／女」の両性しか見ていない、見えていない教団に私の居場所はない。「多様な性と共にある教団」を私は目指したいし、仲間とともに目指していきたい。

仙台教区　鹿音（しかね）のん

ゆらぎ

今度は共に

結婚にまつわる心のゆらぎを書こうと思います。

「婚姻は両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として…」と憲法条文にはありますが、自分たちの結婚はそうなっているでしょうか、考えてみます。

私は実家の寺の跡取りで、私の夫は彼の実家の寺の跡取りです。私は結婚前、禿（かむろ）という姓で、結婚しても禿でいたいと思っていました。彼は森という姓で、彼もやはり前からの姓でいたいと思っていました。夫婦別姓が認められていないのでどちらかをとらなくてはいけません。どちらも自分の姓でいたいという気持ちがあったら、どちらかが諦めるしかないです。夫婦は同等の権利を有するのではないの？と思ってしまいます。

私が禿という姓でいたかったのには２つ理由があります。１つは純粋に自分が禿という姓が好きだったこと。２つ目は実家の寺の門徒さんの中には禿という姓のままで寺を継いでほしいという人がいたからです。彼の実家の寺の門徒さんがどう言っていたかは知りませんが、結婚が決まっても姓が変わるなんてことは考えもしなかったかもしれません。女性が変わることの方が多いからです。結局どちらも姓を変えたくない立場にあった私たちはどうしたのか。最終的に私が姓を変えることにしました。彼が私の姓を名のったら波風がたつ、まだ女である私の姓が変わることの方が仕方ないと思ってもらえるのではないか、と私が考えたからです。彼はただごめんと言っていました。

これで良かったのでしょうか。こんな決め方で私は納得したのでしょうか。大学でフェミニズムを学んだことは何だったのでしょうか。結婚という言葉を聞くと今も心がゆらぎます。ぐらぐらと自分のアイデンティティが揺れます。ゆらぎどころではないくらいに。そもそも両性の合意のみに基づいて成立するはずなのに、何故私は結婚という事と寺という事を分けて考えられないのでしょうか。私は今好きな人をパートナーとして人生を共にできることは最高に味わい深くて幸せだと思いますが、結婚が対等かと聞かれれば、そうではない気がしてならないです。この原稿を書いていたらまた心がざわついてきました。ささくれだってきました。まずは夫と一緒に考えたいです。今度は１人で勝手に３歩下がるのではなく、夫と共に歩めるように２人で考えていきたいです。良かったら皆様も一緒に考えてくれませんか。

大垣教区 第13組 樂邦寺　森（もり） 奈穂（なほ）

女性室公開講座

―分断と沈黙を超え、自立した関係を生きることを願って―

講師●三上智恵さん（ジャーナリスト・映画監督）

2018年2月23日　しんらん交流館

趣旨

沖縄は先の戦争において、日本で唯一地上戦が繰り広げられ、県民の4人に1人にあたる20万人もの尊い命が失われました。美しくのんびりとした南国のイメージの一方で、そこに暮らす人々の日常には、今なお広大な米軍基地のフェンスの風景が続いています。繰り返される市民とりわけ女性への暴力的な犯罪、高い貧困率、基地を巡る分断と沈黙。現代の沖縄が抱えるこれらの問題は、あきらかな加重負担である基地の存在は勿論のこと、本土に暮らす私たちの沖縄への無知や無関心にもその一因があるのではないでしょうか。

今回の女性室公開講座は、しんらん交流館（京都）を会場に、ジャーナリストまた映画監督として、沖縄からメッセージを発信し続けている三上智恵さんをお迎えし、女性の視点から沖縄の現状についてお話を伺います。

誰も傷つけず誰からも傷つけられることのないよう、子どもたちのいのちを守る〝風かたか〟＝「風よけ」になろうと辺野古や高江に集まる女性たちの姿や三上監督のメッセージを通して、一人ひとりが分断と沈黙を超え自立した関係を生きることを願って、今沖縄から私たちに問われていることを聞いていきたいと思います。

2018年2月23日、しんらん交流館において「分断と沈黙を超えて～沖縄と女性～」をテーマに2017年度女性室公開講座が開催され、百名を超える参加者がありました。講師に三上智恵さんを迎え、氏の監督作品『標的の島～風かたか～』を上映後、講演をいただきました。

今回の作品は、三上さんの前二作（『標的の村』『戦場ぬ止み』）に続く基地や自衛隊の配備に揺れ動く沖縄を取材したドキュメント映画で、辺野古や高江に集まる人々や島に根付き、いのちをつないでいこうとする女性たちの姿が描かれ映画の題である〈風かたか（風よけ）〉に込められた願いがさらに増幅されて伝わってきました。

上映後、三上さんは「辺野古の海が埋められて嬉しく思う人はいない。仕方なく容認している人を賛成派と言わないでほしい。決して賛成反対という二項対立ではない」「民主主義が壊れつつあると、沖縄が警鐘を鳴らしていることに日本中の人に気づいてほしい」等、他県の人たちの無関心さ、伝わらないもどかしさを訴えました。

参加者からは「つらくて泣きながら見ました。〝反対と言えなくしてしまうこと〟が日本の状況そのものだと思います」「女性室公開講座の新たな展開としてよかった」等の感想が寄せられました。一人ひとりがどう考え行動するべきか、深く考えさせられる講座となりました。

女性室ホームページ「あいあうnet」開設

2017年12月、女性室HP「あいあうnet」（http://aiau-higashihonganji.net）を開設しました。女性室の事業予定や講師情報などをご覧いただけます。女性室広報誌『あいあう』の閲覧や『女と男のあいあうカルタ』のダウンロード、インタビュー記事など学習素材の提供も行っています。

しんらん交流館HP（http://jodo-shinshu.info）「女性室」バナー、宗派HPの解放運動推進本部内の「女性室」バナーからもアクセスできます。

第7回

女性住職の集い

2018年3月7～8日
しんらん交流館

3月7～8日にしんらん交流館で第7回「女性住職の集い」が開かれました。始めに女性住職である中川和子女性室スタッフから「なぜ女性住職の集いを開催し続けるのか―その願いについて」として発題がありました。参加者一人ひとりの異なる事情や課題を通して見えてきた「つながり」や同じ女性として抱える「生きづらさ」など、家族や門徒さんとの関係から気づいたことが具体的に話されました。

その後、国際女性デー（3月日8日）に合わせて、しんらん交流館1階交流ギャラリーで開催していた「あいさん・あうさんのアイアウすごろく展」を見学。真宗大谷派の女性に関する条例改正などのパネル展示を見た参加者からは「女性住職が誕生するまでに苦労したたくさんの先達がいたことを実感した」という声が聞かれました。午後からは班別の座談会が開かれ、「相談する相手がいなくて孤独だ」「住職なのに坊守会の役職を頼まれて困ったことがある」「自分自身の日常が『無意識の偏見』に満ちていると思った。これを解消するには研修が必要だ」など活発な意見が出されました。

感想文より（抜粋）

- 男性の住職に寄っていくのではなく、自分の住職としてのオリジナルの形を作るのが私たち女性住職なのではないかと思った。
- それぞれの場で頑張っている方々との出会いは、刺激のあるものでした。一人じゃないんだということがわかり、有難かったです。
- 具体的に行動されている先輩の方々の活動を聞くことができ、少し光が見えてきた気がします。
- 真宗本廟でのお朝事のお勤めをもっと近くでいただいた方がいい。作法（出退や御文箱の扱い）を身につけるチャンスがそこにあると思います。
- 同じ立場の人と話し合う機会がなかなかないので、「女性住職の集い」は大事ですし、楽しみです。是非、来年も参加したいと思います。
- 組内の女性住職に対して「つなぎですね」と言った僧侶がいたが、別の僧侶が「我々は皆、つなぎです」と言い返したことが嬉しく、安心感をもちました。こういう風に考える人が増えてきそうに思います。
- 念仏や荘厳、給仕などについて「どうしてますか」「これで良いですか」等の話がひとつも出なかった。苦労話を聞くために来たのか。これから続く若い女性住職のためにも集いではなく、研修であるべきだと考えます。
- 同じ立場の人の話はそれだけで力がある。儀式作法、教義の学びだけが研修と思っている人には予算のムダ使いと思われるかもしれないが、集いに参加して元気をもらうとまた次の日から法務に努力できる。
- 「女性住職の集い」に出た意見を集約し、記録に残してほしい。

お知らせ

『女と男のあいあうカルタことば集』を増刷しました（第2版第1刷）

『女と男のあいあうカルタことば集』は、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌を記念して2011年に発刊されました。本冊子は、女性室で開催している第8回から第10回までの「女性会議」や日豊教区、久留米教区、京都教区の委員会などで作られた約200句をもとに編集されたものです。自分の気持ちを五七五で表現された言葉は、印象的なイラストの『カルタ』と共に様々な気づきを与えてくれます。

今回の増刷にあたって「番外編」を7句入れ替えています。たとえば、「男女の話 それにもでない LGBT」――なかなか多様性を認められない私たちのあり方が問われる一句です。今後も、また新たな句が生まれることでしょう。少しずつであっても確かに進化する、そんな『ことば集』をめざしていきたいです。

冊子をご希望の方は、解放運動推進本部女性室までお問い合わせください。

『あいあう』とは…

この広報誌の名前である『あいあう』は、親鸞聖人によって書かれた『教行信証』（顕浄土真実教行証文類）「行巻」の「今みなまた会して、これ共にあい値えるなり」【真宗聖典一五九頁】という言葉から名づけられました。

「遭遇うこと難し」とか「遇いがたくして今遇うことを得たり」という言葉もありますが、いずれにしましても出遇いのよろこびが表わされているのでしょう。

日々の生活にあって、わたしたちが〝生きる〟ということを考えたとき、それは、いろいろな人と声をかけあってこそ〝生きる〟ということがなりたっているといっても過言ではありません。しかし、時にその声が届かなかったり、行き違ったり、そのためにいろいろな出会いをしていながら、まわりの人を見失っているのではないでしょうか。

いま、その出会いそのものに出遇いなおすことによって、自然に向きあうことのできるつながりを回復していきたい。『あいあう』という言葉にはそんな願いがこめられています。

あい、あう、女性室では活動を通してさまざまな出会いを積み重ねていきたいと思います。

『あいあう』『メンズあいあう』のバックナンバーについて

バックナンバーをご入用の方はお問い合わせください。女性室HP「あいあうnet」でもご覧いただけます。

新スタッフ紹介

大橋尚代（女性室スタッフ）

住職である夫と長女、義母、ノルウェージャンフォレストキャット風の雑種の猫と暮らしています。二女と三女は大学近くで2人暮らし。来年の春には群馬県から実母を迎えて、我が家の平均年齢がグッと上がる予定です。

10年ほど、大垣教区の教化委員として男女共同参画というテーマに取り組んできましたが、当初教化委員会全体で女性は2人という時代もあったそうです。このテーマを扱っていた事業部は、夕方に会議はしない、お茶は各自持参などなどいろいろな工夫を施して女性の委員も増えました。まずは形から整って……。試行錯誤の歩みの中で女性室との関わりがあり、このたびスタッフになりました。今、個性的なスタッフに囲まれて日々たくさんのことを吸収しています。力を蓄えて、足腰を鍛えて、各教区の人との一つ一つの関わりを大切にしていきたいと思っています。

谷 祐真（女性室スタッフ）

このたび、ご縁をいただいて女性室スタッフになりました。現在38歳、生まれ育った自坊の住職となって3年目で、7歳と4歳の娘2人の父親でもあります。私はお寺の3人兄弟の長男として、男性が多い家庭環境で生まれ育ちましたが、現在は女性が圧倒的多数を占める環境で生活をしています。

娘たちが誕生した際、私は子どもの性別に対してこだわりが無かったのですが、ご門徒からは3人目（男子）の誕生を願う声を聞くことがあり、未だに「跡継ぎ」＝男子という考え方が根強いことを実感しました。その時から、男女平等の宗門やお寺の実現は、私の課題として意識し続けてきたことでした。

女性室スタッフとして歩み始めましたが、まだまだ学びが浅く、力不足の状態です。先輩方のご指導を仰ぎながら、少しずつ学びを深めていきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

女性室の動き

【スタッフ派遣】

2018年

1月24日　山陽教区「男女共同参画推進委員会学習会」講師
1月31日　大谷専修学院「如来の御名による解放学習～セクシュアルハラスメントについて」講師
3月15日　奥羽教区「男女共同参画推進実行委員会 公開学習会」講師
4月24日　大阪教区「女性住職の集い」アドバイザー

【公開講座】

2018年2月23日　会場：しんらん交流館
講　師：三上智恵さん（ジャーナリスト・映画監督）

【男女両性で形づくる教団をめざす協議会】

2017年12月8日　会場：しんらん交流館

【女性室スタッフ学習会】

2018年２月２日　会場：しんらん交流館
講師：平山 亮さん（東京都健康長寿医療センター研究所 福祉と生活ケア研究チーム研究員）

【あいさん・あうさんのアイアウすごろく展～近現代の女性たちの歴史～】

2018年3月1～23日　会場：しんらん交流館

【第7回女性住職の集い】2018年3月7～8日　会場：しんらん交流館

【第18回女性会議】

期　間：2018年5月７～８日　会場：真宗本廟 研修道場
講　師：平 雅行さん（大阪大学名誉教授・京都学園大学特任教授）
テーマ：一人に立つ　～聖教に見る性差別を考える～

編集後記

このたび、女性室掛を拝命いたしました。

今まで「男だから」「女だから」という理由が使われる場面に何度も遭遇してきましたが、どこか違和感を覚えつつも、受け流していました。ご縁あって女性室に携わることとなり、同時に「性差別」ついて考える機会をいただきました。何気なく使っている言葉に実は差別性が潜んでいることを知り、自分自身も何となく流してきたことに気づきました。「男だから」「女だから」という凝り固まったイメージに捉われて見過ごしてしまいがちですが、言葉や行動によって相手がどんな気持ちになるのか考え、尊重していかなければならないと思いました。

性差別の問題について考え始めたばかりですが、「女性室」の一員として一から学んでいきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

（大山我聞）

女性室広報誌 あいあう

女性室広報誌『あいあう』第 29 号

発　行　2018 年 6 月 10 日
発行人　草野龍子
発行所　真宗大谷派　解放運動推進本部女性室
〒600-8164
京都市下京区上柳町 199 しんらん交流館内
TEL　075-371-9247
FAX　075-371-9224
宗派ホームページ　http://www.higashihonganji.or.jp
女性室ホームページ　http://aiau-higashihonganji.net

表紙絵：上田 文

この春（2018）、若い人たちを中心にいろんな人が集まって、セクシズムに反対する「＃私は黙らない0428」という街宣が、新宿アルタ前で行われました。その時使われていた「I won't be silent.」というプラカードから、絵のテーマをもらっています。

このところ、性暴力や女性の排除に関する話題が堰を切ったように溢れてきた印象があります。それは、今特別ひどいことが持ち上がっているというわけでなく、これまで「取るに足らない」「あなたも（が）悪い」とされてきた事に対して、「それはおかしい」と少しは言いやすくなってきたからかもしれません。とはいえ、声を上げることに対する重圧は未だ動かし難く存在します。

未来の若い人たちにいつまでも同じ思いをさせたくないと願い、「I won't be silent.」と立ち上がる絵にしました。

セクシズム…性別を理由に人を差別する制度。また、それを維持するような実践。（三省堂　大辞林より）